

○小中一貫教育を推進するための人事上の工夫

1. 小中一貫教育の導入状況

- 実施市町村数：全 15 市町村のうち 2 市町村

(市町村数・学校数等は平成30年4月1日現在)

2. 小中一貫教育の導入の背景・目的

● 小中一貫教育を導入した背景

- ・本県においては、新富山県教育振興基本計画の基本施策3「子どもの健やかな成長を支え、元気を創造する教育の推進」の主な取組の一つとして校種間連携の推進をあげており、その一つの形として小中一貫教育の研究に取り組むこととした。

● 「小中一貫教育推進事業」の目的

- ・県内2市町村において、小中一貫教育の成果と課題を具体的な取組から明らかにするとともに、連絡協議会を開催し、各市町村の取組について情報交換の場を設ける。また、大学教授を招いて研修会を開催し、全国的な状況や小中一貫教育を進めるポイントについて講演をしていただく。このような取組を通して、小中一貫教育に対する理解を深め、各市町村の事情に応じて、小中一貫教育に取り組むことができるようにする。

3. 本調査研究において取り組んだ内容

【富山県における取組内容】

● 小中一貫教育を推進するための人事上の工夫について

【調査の実施】

- ・「小中一貫教育における兼務に関する配慮事項について」を研究テーマとして、兼務発令を行っている市町村で取り組まれている①小学校と中学校の接続状況や、②学習評価の工夫、③負担軽減策などについて調査し、その結果について取りまとめた。

【調査結果のまとめ】

①小学校と中学校の接続状況について

- ・小学校6年生が、中学校1年生と交流したり、共同活動したりする場を設け、次年度中学校に入学する際の円滑な接続を図る。
- ・中学校の授業に小学校時代の担任がT2として生徒指導の充実に重点を置いて指導したり、子供の様子について情報交換したりして継続的に指導する。

②学習評価の工夫について

- ・小・中学校の担当者が評価について協議する場を設け、より適切に評価できるようにする。
- ・中学校英語担当教員が小学校外国語活動を担当する場合、同様に担当する他の中学校教諭との連絡や、教育センター等における小学校外国語教育に関する研修への参加について配慮する。

③負担軽減策について

- ・兼務者の校務分掌や授業の持ち時間数を軽減し、事前打ち合わせ時間を確保できるようにする。
- ・兼務する授業の前はできるだけ空き時間とし、教材研究の時間として確保する。
- ・小中学校の管理職が互に行事の多い時期を把握し、授業や分掌事務の量を調整する。

【小中一貫教育を推進するための人事上の取組】

- ・小中一貫教育に取り組む学校が増えるにつれ、兼務発令を申請する学校が増えてきているが、事前に兼務者への配慮等を学校からまとめて提出してもらい、その内容を十分に精査した上で発令することとしている。

○兼務者へのおもな配慮事項

- ・小中の兼務者の総授業時数は配慮されているか。
- ・校務分掌において負担がかからないよう配慮されているか。
- ・外国語活動におけるALTとのTTや他教科におけるTT等については、十分に打合せや教材研究の時間が確保されているか。

4. 本調査研究において取り組んだ内容

【本調査研究に協力した市町村における主な取組内容】

舟橋村

●小中一貫教育における「学びの型」を活用した教育課程・指導方法の取組

①Plan－発達の段階を踏まえた「学びの型」の構築

- ・「学習課題をつかむ→自分で学ぶ→仲間と学び合う→仲間との学びを課題解決に生かす→自分の学びを振り返る」の5つのステップで構成された「ふなはし『学び合い』スタイル」を取り入れた。

②Do－教科間及び学年間を貫く「学びの型」の実践

- ・「ふなはし『学び合い』スタイル」のステップを意識した授業を実践し、課題解決の過程を可視化した構造的な板書に取り組んだ。
- ・「ふなはし『学び合い』スタイル」「〇〇上手になろう」の活用により、発達の段階や習熟度の違いがあるからこそできる小中合同異学年学習が可能になった。

③Check－「学びの型」活用による成果

- ・小中一貫教育に関する成果は小学生であった児童が中学生になってどのように感じているかで考察できると考えるならば、「学びの型」による成果は大いにあったと判断でき、小中教職員も手応えを感じている。

高岡市

●小中一貫教育を推進するための教育課程・指導方法上の取組

【モデル校での実践研究】

①系統性・連続性を踏まえた学習指導の工夫

- ・中学校教員の乗り入れ授業による小学校音楽科の指導や、総合的な学習の時間での小中連携によるキャリア教育、特別支援学級の交流学习を行った。
- ・小中合同による運動会や避難訓練の実施、保健委員会の取組や部活動体験、挨拶運動やノーメディア週間の取組を行った。

②小・中の交流活動による自己有用感の向上

- ・小中合同運動会を開催し、小中学生が一緒になって、応援や団体競技を行った。中学生は小学生の模範となろうと努力した。
- ・小学生の部活動体験会を実施し、中学生が小学生に手本を見せながら一緒に活動した。小学生が中学校生活への期待を高めた。
- ・小中連携で行う活動に当たっては、校舎が隣接している利点を生かし、昼休みや放課後等の時間を効果的に活用して、小中の担当者が行き来し、打合せを行った。

5. 今後の取組

● 今後、小中一貫教育が進んでいく上での人事上の配慮等について

- ・本調査研究によって小中兼務を行っている各学校から提出された「兼務に関する配慮事項」をまとめ、市町村教育委員会に情報提供するとともに、学校訪問研修等の際に、具体的な取組について周知していくことにより、小中一貫教育の理解の浸透、校種間連携の推進につなげていく。

● 今後の小中一貫教育についての取組

- ・小中一貫教育を導入する市町村教育委員会への支援、教育課程の編成等について助言していくとともに、全国学力・学習状況調査の調査・研究を通しての成果、課題等を把握していく。

○小中一貫教育における「学びの型」を活用した教育課程・指導方法上の取組

1. 市町村の概要

- 人口： 3,058人（平成30年5月1日現在）
- [小学校] 学校数：1校，児童数 231人 [中学校] 学校数：1校，生徒数 109人
[義務教育学校] 学校数：0校，児童生徒数 0人（学校数・児童生徒数は平成30年5月1日現在）

2. 小中一貫教育の導入の背景・目的

- 小中一貫教育を導入した背景
 - ・小・中学校が位置的に近く，学年構成メンバーがほとんど変わらず進級していくという状況から，これまでも児童生徒の交流や教職員の連携が図られてきた。さらにスムーズな小中接続を実現するため，目指す子供像と授業像を共有し，「日本一小さな村だからできる連携，付けられる力」を明確化した。
- 「小中一貫教育推進事業」の目的
 - ・舟橋村で育ったことに自信と誇りをもち，心身ともに健康でたくましくこころ豊かな子供を育てるため，これまでの地域性を生かした小・中学校の交流及び連携をさらに推進することで，9年間を見通した連続性・系統性のある教育の在り方を検討し，確かな学力の育成を図る。

3. 本調査研究において取り組んだ内容

- 小中一貫教育における「学びの型」を活用した教育課程・指導方法上の取組について

「知・徳・体」小中合同三部会にて作成した小中一貫カリキュラムに，これまでの連携や新たな異学年合同学習を位置付けた。そして，主体的・対話的で深い学びを小中一貫教育の中心に据えて取り組むことが，目指す子供像の実現に効果を成すと考え，児童生徒の中に「学びの当事者」としての意識とスキルを育て，自己の変容や成長が実感できるような単元構成や授業展開を全教員が仕組めるよう，「学びの型」の構築と実践に取り組んだ。

【Plan－発達の段階を踏まえた「学びの型」の構築】

- ・右のような5つのステップで構成された「ふなはし『学び合い』スタイル」を取り入れ，発達の段階を踏まえた単元や授業でのゴールイメージから遡る形で4段階を策定した。

【Do－教科間及び学年間を貫く「学びの型」の実践】

- ・日々の各場面で「ふなはし『学び合い』スタイル」のステップを意識した授業を実践し，課題解決の過程を可視化した構造的な板書に取り組んだ。国語科を中心に言語活動スキルの段階的な習得にも取り組み，その基準を指導のポイントや児童生徒の自己評価及び相互評価に生かした。ホワイトボード，付箋，電子黒板等のツールを活用することで，協働学習が活性化した。全国学力・学習状況調査(H30.4)における生徒質問紙の結果によれば，「授業では，課題の解決に向けて自分で考え，自分から取り組んでいたと思う」「生徒の間で話し合う活動を通じて，自分の考えを深めたり，広げたりすることができている」と答えた中学3年生の割合が共に90%を超えた。

【Check－「学びの型」活用による成果】

- ・中学生を対象にしたアンケート(H30.11)では「学び合いスタイルに継続して取り組むことで，話す力，聴く力，書く力，読む力が伸びると感じる」と答えた生徒が全学年で80%を超えた。また，「異学年との合同学習を通して，新たな気付きを得ることができる」と答えた生徒が全学年で90%を超えた。小中一貫教育に関する成果は小学生であった児童が中学生になってどのように感じているかで考察できると考えるならば，「学びの型」による成果は大いにあったと判断でき，小中教職員も手応えを感じている。

学び合いスタイル～中学校版～

- ステップ① 課題をつかむ
↓ 【学習の見通し理解】
- ステップ② 自分で学ぶ
↓ 【自己の現状理解】
- ステップ③ 仲間と学び合う
↓ 【意見の類型化・焦点化】
- ステップ④ 仲間との学びを生かす
↓ 【授業の山場】
- ステップ⑤ 自分の学びを振り返る
↓ 【自己の変容を実感】



小5児童と中2生徒の学び合い

4. 今後の取組

- 小中教職員による「ヨコ」と「タテ」の連携
 - ・児童生徒が時と場を共有する頻度が問題ではなく，小中教職員がゴールイメージを共有し，発達の段階に応じた学びを保障するための役割分担を明確にすることが，今後の小中一貫教育推進の要であり，学校内の「ヨコの連携」と小・中学校間の「タテの連携」の確立を図っていく。

○小中一貫教育を推進するための教育課程・指導方法上の取組

1. 市町村の概要

- 人口：171,958人（平成30年12月31日現在）
- [小学校] 学校数：26校，児童数7,609人 [中学校] 学校数：12校，生徒数4,115人
（学校数・児童生徒数は平成30年5月1日現在）

2. 小中一貫教育の導入の背景・目的

- 小中一貫教育を導入した背景
 - ・本市総合計画に掲げる「子育てや教育の環境が充実し、選ばれるまち」であり続けるために、教育の一層の充実が求められており、時代や子供たちを取り巻く環境等の変化に即し、子供たちの連続した成長を切れ目なく支援する小中一貫教育の効果的な推進に取り組むこととした。
- 「小中一貫教育推進事業」の目的
 - ・全国の先進事例の調査研究を行うとともに、ものづくり・デザイン科等本市のこれまでの小中連携、小中一貫教育の成果を踏まえ、モデル校等での実践研究の成果や課題を検証し、具体的な取組内容の質を高め、小中一貫教育の推進に向けた体制整備を着実に進める。

3. 本調査研究において取り組んだ内容

● 小中一貫教育を推進するための教育課程・指導方法上の取組について

施設が隣接する国吉小学校と国吉中学校をモデル校として、小中一貫教育についての実践的研究を行い、その取組の成果を市内小中学校に公開した。また、小中一貫教育について、教職員や保護者及び広く市民の理解が深まるよう「高岡市小中一貫教育講演会」や「高岡市教育将来構想市民懇談会」を開催し、効果的な小中一貫教育の推進について啓発を行った。

【モデル校での実践研究】

① 系統性・連続性を踏まえた学習指導の工夫

- ・兼務発令により、中学校の音楽科教師が年間を通して、小学校5、6年生の乗り入れ授業を行った。中学校の音楽の授業で行っている発声練習や、オーケストラと吹奏楽演奏との聞き比べを取り入れた鑑賞指導等、音楽科教師の専門性を生かした指導を行った。また、合同授業を実施し、中学生がグループ学習のリーダーとなった。



<音楽科の乗り入れ授業>

② 小・中の交流活動による自己有用感の向上

- ・小中合同運動会を開催し、小中学生が一緒になって、応援や団体競技を行った。中学生は小学生の模範となろうと努力した。
- ・小学生の部活動体験会を実施し、中学生が小学生に手本を見せながら一緒に活動した。小学生が中学校生活への期待を高めた。
- ・小中連携で行う活動に当たっては、校舎が隣接している利点を生かし、昼休みや放課後等の時間を効果的に活用して、小中の担当者が行き来し、打合わせを行った。

【成果と課題】

- ・乗り入れ授業により、小学生が中学校での学習への興味・関心を高め、進学に対する不安の軽減につながった。
- ・学校行事、児童生徒会活動における小中学生の交流活動を通して、中学生は自己有用感を高め、意欲的に活動することができた。
- ・9年間を見通した教育課程を編成し、相互乗り入れ授業で補充的な指導や発展的な指導の充実を図るなど、児童生徒のよりよい学びの場となるよう、小・中学校の教職員が相互理解を深めながら取組を改善する必要がある。
- ・県小中一貫教育連絡協議会での交流等によって、他市町村のモデル校3年目の小中学校の取組から、自校の実態に応じて、参考となる点を取り入れるなど、取組を効果的に進めることができた。

【中学生のアンケート結果】

- （肯定的な回答の比較 7月→12月）
- ・小学生や地域の人と関わったり協力したりして活動している。（87%→94%）
 - ・自分は役に立っている。（66%→77%）
 - ・自分にはよいところがある。（68%→73%）

4. 今後の取組

● 各中学校区における小中一貫教育に向けた体制整備と着実な取組の推進

- ・令和2年4月、国吉小学校と国吉中学校を義務教育学校に改編し、本市の小中一貫教育のモデル校として、先導的な取組を推進する。
- ・中学校区ごとに小中一貫教育推進のための組織を設け、目指す子供像の共有及び本推進事業の成果や課題の検証等により、質の高い教育活動となるような義務教育9年間を見通した教育課程を編成し、小中一貫教育を着実に推進する。